

## エルンスト・トラーとバイエルン革命

林 敬

Ernst Toller in Münchner Revolution 1918-1919

Kei Hayashi

第一次大戦の帰趨がもはや決定的となった1918年11月、ドイツでは平和を求める民衆の蜂起が全土を揺がし、ドイツの支配体制はこれによってあっけなく崩壊した。その結果生じた権力の空白の混乱の中で、民衆のさまざまな苦悩と希望が交錯した。バイエルンにおける翌年5月までの半年間は、このような背景から生まれた革命運動の上昇と下降の半年間であった。エルンスト・トラー（1893～1939）は、バイエルンの平和要求と社会主義革命の闘いを担い、敗北後は挫折した革命のシンボリック的存在となった。彼は政治的指導者として民衆と共にこの革命に共同体への夢の実現を託した。一方、革命が敗北に終わった後は表現主義の劇作家として自ら体験した状況を作品化し、敗北後の共和国の状況に働きかけた。特に革命を扱った作品は民衆の中に共感と支持を呼び起こし、革命への思いの込められた、「トラー伝説」が現われるほどであった。

トラーが我々の興味を引くのは、前提として、彼の生きた「ドイツ革命」からワイマール共和国の時代を経てナチスの時代に至る、時代そのものに対する関心があり、トラーがその時代の希望と苦悩に深く関わっていたからである。そして、彼の生き方には社会変革を思念する個と現実の革命闘争や政治的全体との矛盾が悲劇的に現われていた。（ちなみに彼は自ら支援したスペインの人民戦線の敗北後、亡命先のニューヨークのホテルの一室で自殺した。）

彼は、暴力的に規定された時代の、激しい転変の中で、社会主義的土台の上に立つ人間共同体の実現を希求しながら、同時に、人間愛 — 社会主義革命 — 暴力の問題を苦悩した。一つにはそれが解放的暴力であるにしても、現実の暴力の中には、革命のイデーにとって致命的な人間性の墮落が潜んでいるからである。また一つには、革命が現実のものである限り、必然的に暴力が行使されざるを得ないからである。暴力のもつ両義性は彼にとって克服しがたい、革命の内在的矛盾であった。そして、結局彼は現実の暴力によって追放されたが、暴力的迫害は決してナチスによってばかりではなかった。トラーに対する評価は、政治的にも文芸批評的にも、さまざまに試みられてきたが、しかし、彼が苦悩し、あるいは提起してきた問題そのものは解決されたわけでも、克服されたわけでもない。それは今日なお、アクチュアルな問題としてとどまっているのである。

本論は、それゆえ、とりあえず文学研究以前のものとして、トラーの伝記的展望のもとに、

時代との相剋から形成された彼の基本的革命観を考察し、さらにバイエルンの現実の革命の中で、問題がどのように自覚されていったかを理解しようとする試みである。もっとも、この革命における体験の考察はトララーの作品の正当な評価の欠かせない条件ともいえるのである。<sup>(1)</sup>

## 1

トララーは1893年12月1日、東プロセインのポーゼン州ザモチン（現ポーランド）で、ユダヤ人家庭に生まれた。少年時代を故郷で送った後、1914年2月にグルノーブル大学に留学した。半年後に第一次世界大戦勃発。ジュネーブ経由で帰国を強行し、ミュンヘンのバイエルン第一歩兵一砲兵連隊に志願。西部戦線のヴェルダン近郊で13ヶ月従軍した。1916年5月に心臓障害などで野戦病院に入院。1917年1月に除隊になり、ミュンヘン大学で法学および哲学の聴講手続きをとる。夏にリルケやトーマス・マンと会い、秋にはマックス・ウェバーに従ってハイデルベルク大学に移った。ハイデルベルクで平和主義的綱領をもつ「文化政治青年同盟」を創設した。しかし、右翼から脅迫されたり、当局から禁止されたりで、12月にベルリンへ難を避けた。ベルリンでクルト・アイスナーと知り合った。アイスナーとの出会いはトララーにとって一つの区切りで、この後彼は現実の政治運動に加わっていった。

以上の時期にトララーの精神的・政治的動向にとって核となる部分が形成されたが、まず注目される点は、彼のユダヤ人の自覚である。幼ない頃から人種差別を体験した彼は、自伝の中で「僕たちは何故ユダヤ人なの？」と聞いて母親を悩ませたことを報告している。ユダヤ人であることの悲しみは、さしあたり、彼のドイツへの一体感に対する強い憧れの素地になった。それゆえ、戦争が勃発したとき、帝国内で人種対立も含めてあらゆる対立が解消したように感じて率直に喜んだ。彼が兵役を志願したのもこのような気持からであった。

しかし、自ら志願した前線で、フランスの民衆をもまき込んだ戦争の悲惨を体験した。その一つに鉄条網に引っかかったまま、2日2晩苦しみの叫び声をあげながらこと切れた兵士の目撃がある。<sup>(3)</sup>トララーにとって、その兵士がフランス人であろうとドイツ人であろうと、そのような区別は残酷な死の印象の前には問題でなくなった。一種の非現実感を感じるほど他愛なく、多くの死者たちに出会ったが、彼はそこに「フランス人の死者」や「ドイツ人の死者」でなく、「死んだ人間」を見た。そして、死者たちに対する哀悼は戦争への疑念となり、精神的な打撃や疲労から彼は心身を病んだ。<sup>(4)</sup>W・ローテはこのような戦争体験を愛国主義者から平和主義者への転回の原体験と做している。<sup>(5)</sup>同時にトララーの思いは「ドイツ」から普遍的な共同体へ向けられるようになったのである。

トララーは除隊になってから懸命に戦争を忘れようとしたという。その頃、例えばトーマス・マン（トララーはマンの家に招待されて、その際に自分の詩の批評を願ったことがある。）はまだ《非政治的人間の省察》の執筆中で、ドイツの戦争の意義を擁護する立場をとっていたが、トララーにとってはもはや「偉大な時代」には思われなかったし、戦争による犠牲も無意味に思われた。しかし、戦争を忘れることはできなかった。それゆえ彼は逆に時代の真実を知り、心から行為することを求めた。この意味で「市民的」学者は彼の期待を満たすものではなかった。戦場の悲惨を思うにつけ、学者たちの「偉大な言葉」は、現実に何も変えることのない空語で

しかなかった。

ハイデルベルクでトラーは学生仲間と「文化政治青年同盟」を創設した。この活動を通じて、トラーの基本的な思想や姿勢が、また、活動の特徴などが具体的に現われてくる。思想的な面では先ず、戦争に帰結したヨーロッパの現実、国内を支配していた戦争イデオロギーに対する反乱があった。<sup>(6)</sup>この反乱について、W・ローテは表現主義的テーマがトラーにおいては政治的なものになったと説明している。<sup>(7)</sup>この「青年同盟」の綱領では、政治や経済の物質優先のあり方を人間優先の世界に変えること、およびそのことのために現実に行動することが主張された。具体的には

- ① 行動主義 — 愛と責任意識から
- ② 知識人の役割 — 民衆の解放者として
- ③ 共同体理念 — 諸個人の共同体
- ④ 実現の方法 — 精神的な働きかけ、内面的変化によって

が宣言された。ただ、この宣言自体は全体として政治的よりも文化的色合いが濃かった。「貧困の廃棄」や「生活資料の有意義な生産と公平な分配」の要求など、社会主義に特徴的な傾向もみられたが、雰囲気以上のものではなかった。別な文書では「権力の拡大の代りに、人類の道義を中味にもつ文化の深化」<sup>(8)</sup>というような平和主義的な変革が呼びかけられている。ここでちょっと注目されることは綱領はトルストイの《復活》などの普及も主張していることである。即ち、綱領にみられるトラーの思想や姿勢にはトルストイのそれとの類似がみられた。トルストイにおいても国家に代表される反道義的社会秩序を変革するために暴力によらず、人間自身の変化が、良心の革命が、愛による諸矛盾の克服が説かれ、実践に移されたのである。<sup>(9)</sup>

しかし、トルストイの考えが確かに衝撃的で、さらに鋭い批判力を備えてはいるが、提起した諸問題の解決方法が内面に求められる限りで、現実の次元では空想的であらざるを得なかったように、トラーの場合も、本質的には言葉の飛翔であった。実際、言葉以外になされたことは、各方面への綱領の送付ぐらいであった。「市民的」文化の行動的側面の貧困の批判から行動を提起したにもかかわらず、克服できなかったトラー自身の行動の貧困を、W・ローテは「行動主義的からっぽの身振り」と評している。しかし、一方で彼は表現主義者たちが「国家的、民族的、階級的、プロレタリア的思考図式」を越えていったことを指摘しながら、トラーの場合もその人間に対する思いは反国家的、境界止場的であり、まだ戦争中であった1917年の歴史状況の中では「政治的に最も進歩的で、精神的に最も革命的な姿勢であった」と評価している。<sup>(10)</sup>いずれにしても、トラーの最も初期の活動に現われた、反戦、人間の共同体のイデー、変革の方法論における平和主義、というような基本思想はトラーのその後の行動の核心となった。

ところで、ハイデルベルク時代に、トラーは後のミュンヘンにおけるレーテ政府の中心人物の一人であるグスタフ・ランダウアーと接触を求めた。というのは、自ら語るところによるとランダウアーの《社会主義への呼びかけ》(1911)が決定的な影響を及ぼしたからである。ランダウアーの思想はトラーの思想に現実的な基礎となる概念を与えた。つまり、共同体の社会主義的基礎がより明確に意識された。ハイデルベルクを逃れる前日に書かれたランダウアー宛の手紙の中では、暴力と不正の権化である国家に対して、「労働生産物の他の等価物との平和的交換によって経済的に結びついた、自由な人間の共同体」<sup>(11)</sup>が対置されている。この当時は

これが実現されるための条件は、理論的にも状況的にも不十分であったが、ランダウアーとの出会いはトラーの社会主義的潮流との合流を精神的に準備したのである。

1917年12月21日にベルリンへ避難してから、労働運動に接近し、当時ベルリンに滞在中のクルト・アイスナーと知り合った。(アイスナーはトラーにとっては初期の平和主義者として、その信念の強さのゆえに信頼に値したし、また「精神の人と民衆の裂け目を埋めていた」ことでも一つの理想的人間像であった。)<sup>(12)</sup> 1918年1月、アイスナーに従ってミュンヘンに赴いた。学生集会などで平和主義的、従って当局にとっては好ましくない演説をした。ミュンヘンの軍需工場を中心に行なわれた、1月31日からの平和要求のストライキに参加。自作の反戦的詩やドラマ(後に《変転》として完成する。)の反戦的場面のチラシを配布した。1月31日の夜、アイスナーはじめストライキ指導者が逮捕された。志願して釈放交渉団の一員となり、2月2日の集会で6,000名の労働者を前に演説した。<sup>(13)</sup> 2月3日に逮捕され、3ヶ月間ミュンヘンの軍刑務所に収監された。国家反逆罪で審理されたが不起訴。しかし、再度兵役に就かされ、ノイウルムの療養部隊に所属した。9月に兵役不能として最終日に除隊された。

トラーを最初にプロレタリアートに接近させたのは反戦闘争であった。1918年1月のストライキ闘争において、それが階級闘争という認識はなかった。むしろ、そこに自己を犠牲にした正義のための闘いを見た。自己犠牲という観念はトラーにとっては闘争の担い手の道義性を評価する基準であり、また、闘争の現実的手段でもあった。例えばアイスナーの死はそのような自己犠牲であったが、トラーはそれを顧みながら、「一つのことが彼を他のすべての共和国大臣から区別する。彼の行為への意志、決死の勇氣である。……彼は死を恐れなかった。……死に対する恐れを意識的に克服したものにのみ大衆はついていく。」<sup>(14)</sup>と讃えている。また、闘争路線においても、精神のあり方においても、彼の対極にいたオイゲン・レヴィネ(彼が自らを裁く法廷で「我々コμμニストはみな、死を猶予されている死者である。」と弁論したことはよく知られている。)の死刑に対して、トラーは獄中からバイエルン政府に「あなたがたは一定の経済的並びに政治的前提に基く、ヨーロッパ的拡がりの革命運動を死刑宣告によってせき止められると信じているのか。」と、憤りと悲しみをもって抗議している。<sup>(15)</sup> ここにもレヴィネの犠牲的死に対する敬意が容易にみとれる。

1918年1月のストライキで、戦場の悲惨に喘いでいる同胞のために自己犠牲を厭わない労働者たちに出会って、トラーは初めて非暴力的な現実の具体的闘争手段を確信した。「目的を信じている大衆運動は指導者の逮捕によってはせき止められない。信念が決定的要素であり、それが少々病んで弱まり、分解したとき、初めて敵対権力が運動の統一を爆破し、それを無力な、意志する能力のない群れに解消できるのである。これらの労働者は彼等のなすべきことを信じている。指導者の逮捕のニュースに彼等は逮捕者の釈放を警視総監に要求する代表団の選出で答える。……彼等が1時間以内に戻らないときは、第二の代表団が釈放を要求する。……ストライキは力を失わないで続けられる。」<sup>(16)</sup> 労働者相互の、さらにトラーの労働者に対する連帯と、闘争手段としてのストライキが発見された。このストライキ闘争思想は一見トルストイの非暴力改革思想を思わせる。S・ツヴァイクによれば「数千人またそれ以上が、各々自己の人格と確信から、屈伏せず進んでシベリアに送られるなら……彼等の英雄的受け身により、革命家た

ちが団結した暴力によって達成するよりも多くのものを達成する。」というのがトルストイの考えであった。しかし、決定的な相違は、トラーが1月のストライキ闘争で自己犠牲の上に連帯した闘争の担い手を現実に見出したことであり、トラーはそのことによってそれまでの空想性を一步踏み出し、同時に反戦的労働者の中に一定の立場を築いたのである。<sup>(18)</sup>

一方、トラーの社会主義の確信は1月のストライキで逮捕されてから明確になってきた。獄中でマルクスやローザ・ルクセンブルクの著作を読んだことにより、「今や私は初めて社会主義者になる。社会構造に対する視力が鋭くなる。<sup>(19)</sup>」もっとも、この領域でのトラーの理論的知識は、共産党的視点からの批評によれば、革命運動の指導者になるためには十分ではなかったという。<sup>(20)</sup> 確かに、W・ローテもトラーの病気体質と精神的素質の関連に注目し、「冷静な分析、落ち着いた考察、自制はトラーがほとんど持っていなかった特性であった」と指摘している。彼の理論的不十分さはこのような性格的な面からも説明されるが、むしろ彼にとっては社会主義の理論的な研究よりも、その根底にあるべき血の通った暖かさ、そこからの実際行動がいつも問題であった。「11月革命」に始まる一連の現実的闘争を経験したあとで、「外的には最少限の暴力によって、内的には諸個人に対する尊重の精神、社会的責任感情の精神、愛の精神によって結びついた世界共同体<sup>(22)</sup>」と公式化した。元来、「共に苦しむ勇氣」が、従って知識人の行為に対する責任感がトラーを階級闘争よりも、ランダウアーやアイスナーの「倫理的な社会主義」に向かわせたのである。<sup>(23)</sup> トラーにとっては、社会主義においても内的状況が問題であった。諸個人の平和で自由な生活が彼の目指すところであり、社会主義は「帝国」という抑圧機構と正反対に位置づけられる、そのための制度的保証であった。

## 2

1918年11月7日、ミュンヘンでも革命が始まった。バイエルン共和国が宣言され、クルト・アイスナーが新政府の首班になった。トラーは当時ランツベルクの母のもとで風邪で寝ていたが、熱を押ししてベルリンへ向かった。ベルリンでは11月9日シャイデマンにより共和国が宣言された。トラーはアイスナーと連絡をとり、11月半ばにはミュンヘンに転じた。バイエルン労農兵レーテ中央執行委員会の副議長に就任。1919年1月21日のバイエルン州議会選挙では独立社会民主党から立候補したが落選した。2月初めにベルンで開かれた第二社会主義インターナショナルの会議に参加。2月21日ベルンからの帰途にアイスナーの暗殺を聞いた。3月、独立社民党の議長に就任。4月7日、レーテ共和国が成立し、トラーは革命中央評議会議長に就任。4月13日、共産党系レーテ政府が成立し、トラーは自動的に解任され、一兵士としてダッハウに従軍。現地で赤軍司令官に推された。4月16、17日、ダッハウでのホフマン政府軍との戦闘に勝利。4月26日、共産党との対立により司令官を辞任した。4月30日—5月2日、「白軍」によるミュンヘン攻撃。敗北後トラーは潜伏したが、6月4日に逮捕された。7月14—16日、トラーの国家反逆罪に対する即決裁判。5年の要塞禁錮を宣告され、9月24日アイヒシュテット要塞刑務所に収監された。

当時25才のトラーにとってばかりでなく、あまりにもあっけなく「革命」がやってきた。大戦の敗北が既に決していたにしても、ドイツ帝国は内なる反乱者に対してまったく何の抵抗も

なく自壊してしまった。トラーは後年に顧みて、「民衆はいったい革命を欲したのか？ 彼等は平和を欲していた。戦闘なしで権力が手に入った。」、また、「民衆は社会主義を叫んだ。しかし、過去数年間に社会主義の明瞭な観念を獲得していなかった。彼等は圧制者に対して防衛した。彼等は何を欲していないかは知っていたが、何を欲するのは知らなかった。」と、むしろ権力の空白的状況に民衆にとっての危険を感じたことを述べている。<sup>(24)</sup>このような危惧は別の意味で社民党のものでもあった。各地の平和を求める運動はレーテの形成へと集結されていったが、周知のようにドイツの中央レヴェルでは、秩序を求め、レーテ思想に反対であった社民党の指導の下に、ベルリンのレーテ全国大会において、権力を未知数の国民議会に移譲することが決定された。そして社民党中心の政府は議会制民主主義を守るために、非民主的旧勢力と妥協し、早くもその復活を許した。1918年1月にはベルリンで「義勇軍」がスパルタクス・ブントに指導された民衆蜂起を鎮圧し、この時点ですでにドイツの社会主義革命勢力の後退が余儀なくされた。

バイエルンでも、アイスナー政府はレーテに依拠したものでありながら、議会制を目指した。大衆の自発性に基づく直接民主主義的なレーテと議会制は明らかに矛盾するものであり、アイスナー自身、その矛盾に悩むことになるが、一つには普通選挙による議会の形成は社会民主主義者の長年の理想であった。(この点では、アイスナーが所属していた独立社会民主党内にも、エンルスト・ドイミヒのように、普通選挙による議会が理想であった歴史的條件はすでに過ぎ去った、とする考え方もあった。) さらに、一つにはアイスナーは現実の条件に社会化の無意味さを見た。つまり、廃墟を社会化することはできない、というのであった。それゆえ、「全住民の創造的な協力」(1918. 11. 8付声明)を期待し、生産大衆の自治組織としてレーテを、その頂点に議会を構想した。<sup>(25)</sup>しかし、この構想は余りにも形式的に過ぎた。アイスナーの考えによれば、レーテと議会は密接な協力関係に立たなければならなかったが、現実には他の地区と同じように革命の行き過ぎを恐れた社会民主党とブルジョア層は議会をレーテに対抗する制度として利用したのであった。

トラーは1918年1月の行動を通じて反戦的民衆の中に一定の地位を築いたことなどにより、中央執行委員会の副議長になった。5ヶ月後にはレーテ共和国の革命中央評議会の議長になり、事実上の元首になったが、この昇進についてL・ペーターは、蜂起した大衆の混乱並びに誤った指導を除去し得ない無能を示すものだ、と主張している。<sup>(26)</sup>トラーと同時代人であるシュテファン・グロスマンも「せいぜい従順な新兵の教育ぐらいしか心配していなかった古い党のおかげで、バイエルンには社会主義の後継者がほとんどいなかった」<sup>(27)</sup>ので、トラーの前面への登場は不思議ではないと説明している。

ところでドイツの革命を巡って政治的には「レーテ体制」か「国民議会」かということが決定的争点であったが、現実の機会に直面してトラーが社会主義革命をどのように考えたかは、彼自身は理論的に語っていない。しかし、独立社民党の理論家、E・ドイミヒの明解なレーテ論とトラーの実際の行動、さらにコミュニストからの批判を重ね合わせてみると、トラーの考え方がおおよそのところ位置づけられる。また、第一次レーテ共和国の成立の頃から次第に明瞭になったコミュニストとの相剋からトラーの社会主義革命観の質的特徴が、またそれと関連して、トラーにとっての現実の革命の問題点が理解される。

ドイミヒはレーテ体制が自然発生的に旧来の党や労働組合の枠を越えて成長してきたことに

注目した。そのことは本質的にレーテ体制が改良主義ではなく、プロレタリアートの独裁を目標としていること、そしてレーテがそのための現実的手段であることを意味している。以上の基本認識の下に、官僚体制でない、自己統治組織としてのレーテ体制を次のように構想した。

① 任 務

経済上の任務 — 生産、消費の社会化と管理。

政治上の任務 — 自治体機構の全権掌握と職務処理。

② 機 構

各任務遂行のための下部単位（経営レーテ）から積み上げるピラミッド構成と中央執行機関。これによって経済と政治が統一される。

③ 戦 術

闘争形態あるいは闘争体としてのレーテ — レーテに基礎を置き、その助けによって革命を推進。

プロレタリア民主主義 — 党の境界線の撤廃。

従って、議会制に対しては拒否の態度をとった。実際問題としても、資本の利害と官僚的グループの狭い党派の利害が大きな役割を果たす議会によっては、経済的にも財政的にもひどく破壊された泥沼状態から脱け出すことはできない、という認識であった。<sup>(28)</sup>

議会制に関しては、既に述べたように、アイスナーはドイミヒと違った考え方をした。ただ、トラーは、それがあくまで一定条件下での方便であったことを認めている。社会の日常活動は生き生きとした精神によって下部から浸透されていなければならない、アイスナーはこの意味でレーテデモクラシーの信奉者であったという。<sup>(29)</sup> トラー自身も、ベルリンのレーテ全国会議がレーテに拘束されない国民議会設置を決定した時、共和国は自らの死刑を宣したと感じたこと、一方、自らバイエルン州議会に立候補したことなどから、革命の当初はアイスナーと同じように両方の相互補完的発展を考えていたと思われる。つまり、さしあたり歴史的背景をもつ社会の議会主義的民主化を支持する一方で、受動的なストライキ闘争を一步脱け出して労働者のより積極的かつ建設的な自己統治手段としてのレーテを支持した。しかし、北ドイツの情勢や、<sup>(30)</sup>アイスナー暗殺後のバイエルン州の議会の動きから、議会制にはまったく幻滅してしまった。

アイスナーの暗殺後、バイエルンの情勢は流動化し、議会制とレーテ制の矛盾が表面化した。結局それは4月7日のレーテ共和国宣言に向かったが、このレーテ共和国の成立を巡って、トラーを議長とする独立社民党およびミュンヘン、ラングウアーなどのアナーキストグループと共産党は激しく対立した。トラーは最初外的条件の不利からレーテ共和国に反対であったが、内的条件の充足を条件に支持に回った。トラーにとってはすべての革命勢力の結集が条件であった。このことは単に社会主義三党（社民党、独立社民党、共産党）の参加というにとどまらず、党を越えた民主的協調を意味した。トラーにとっては現実の形態よりもそれを満たす精神が問題であった。従って、大衆の自発性＝民主主義が革命戦術の根底になければならなかった。例えば、それは赤軍の編成の際にも現われている。赤軍兵士は単なる機械であってはならない、その革命的意志が必然的秩序を創造する、新しい社会は自由な人間によってのみ建設される、<sup>(31)</sup>というのであった。

コミュニストの現実把握ははるかに実質的であった。レーテ思想よりは現実のレーテに目が注がれた。例えば、ミュンヘンのレーテはむしろ大衆集会と化していて、そこでは一般政治

問題が討論され、集会は党派政治的な人気獲得のための絶好の基盤となった、と批判している。また独立社民党指導者に対しては、言葉においては火を吹くように革命的であり、演壇上では芝居めいた身振りでサンジュストやダントンを模倣していたが、実際の仕事ではまったくぶざまだった、と酷評している。<sup>(32)</sup>これらの批評の対象となっているところはまさにトラーの現実政治家としての欠点であった。

しかし、このような欠点は、見方を変えると、トラーの美点でもある情緒的素質の現われでもあった。共産党は、下部レーテが十分固まっていない段階では外からの攻撃に対して防衛できない、従って現段階でのレーテ共和国は社民党の挑発であるとの見解で、第一次レーテには反対したが、トラーはすでにレーテ共和国に踏み切ってしまった、バイエルンの他の地区の大衆を見捨てることはできないという理由で、外的条件の悪さにもかかわらずレーテ共和国の形成に参加した。トラーはこのときのことを「このレーテ共和国は失われたドイツ革命を救おうとする、絶望した労働者大衆の向こう見ずの奇襲攻撃であった。」<sup>(33)</sup>と回想している。コミュニストが政治的情勢に敏感になっていた時、トラーは大衆の動向を考慮していた。そして、自己犠牲によって自らを方向づけたのである。W・ローテは冷静に「トラーがレーテ共和国の冒険に、当時の状況で全くリアルでない革命の試行に全力で身を投げ出したということは、彼の内発的衝動的性質から、瞬間瞬間に判断能力のあらゆる柵を引き倒すことのできた感情的性格から説明されうる。」と性格的要因をあげた。しかし、そのあとで、トラーの労働者階級との一致の欲求を忘れてはならない、と注意を喚起している。<sup>(34)</sup>この一致の欲求は単なる憧ればかりではなく、トラーの内面へ注がれる視点と倫理的な現実への意志を現わしており、それによって彼は1918年1月のストライキ以後、労働者階級の中に連帯を見い出してきたのであった。

トラーは結局非共産党的革命勢力を代表する人物になったが、トラーの態度を当時のミュンヘンのコミュニストはさまざまに批判した。トラー自身の理解によれば、主要なものは第一次レーテ共和国の幻想性、共産党主導の第二次レーテ共和国に対する非協力、対「白軍」戦の前線での平和主義的「裏切り」などであった。つまり、現実の政治情勢の把握の無能、プロレタリア独裁の実質の理解不足、特にトラーの「性格の弱さ」からくる革命戦での危険な目と見主義的態度などの批判であった。この立場の延長線上で、L・ペーターはトラーやミュンヘンの態度をブルジョアとプロレタリアの間で動揺する「政治的精神分裂症」と呼び、彼等はレーテ共和国の革命情勢に葛藤をもたらしたと論評している。とりわけトラーの平和主義的態度とミュンヘンの革命の必要条件は矛盾していて、「腹のすわっていない、ディレッタント的『赤軍』建設の試みとあらゆる暴力使用の原則的拒否との間で動揺しながら、彼は彼の指導下にあった『アナーキスト的』レーテ共和国を危険に陥れた。」<sup>(35)</sup>というのである。そして、トラーの不徹底な暴力意識を示すものとして、自伝から次の部分を引用した。

「私は暴力を憎んだ。暴力を行使するよりむしろそれを甘受することを自分に誓っていた。今、革命が攻撃されていたから、私はこの誓いを破ることが許されただろうか。私はそうしなければならなかった。労働者は私に信頼を寄せていた。私に指導と責任を委ねていた。私が今、彼等を守ることを拒絶したら、あるいは彼等に暴力をあきらめることを呼びかけたら、私は彼等の信頼を欺くことにならなかつたろうか。私は流血の結果の可能性を前もって憂慮しなければならなかつたのだ。そして役目を引き受けてはいけなかつたのだ。」<sup>(36)</sup>しかし、トラーにとっては、ここに現われている矛盾をどう考えるかがまさに問題であった。

この問題は結局革命をどうとらえるかの問題にかかわるものであった。革命を階級闘争ととらえる立場と、革命を人間の正義の確立のための闘争ととらえる立場。トラーにとってこの二つは理念において矛盾するものではなかった。しかし、現実の闘争においては、正義の根拠をどこに求めるかの問題が生じた。「大衆」に求めるのか、それとも「人間」に求めるのか。革命闘争後に自らの立場を整理し、明らかにするために書かれたドラマ《大衆＝人間》の根底にあるのはこの問題であった。そこではコミュニストに擬せられる「男」は前者の立場をとり、暴力の問題でも首尾一貫してハードであり得た。一方、反戦闘争と家庭生活の乖離を悩んで獄中自殺したソーニャ・レルヒの墓標として、ソーニャ・イレネ・Lと命名された「女」<sup>(37)</sup>は後者の立場により、大衆の中の憎悪や復讐欲を許容することなく、暴力を「罪」と自覚して殉死した。<sup>(38)</sup>中心点をもう少し詳しく観察してみると、「男」は一つのもの見方、マルクス主義的教義(Lehre)から人間集団を対象としてとらえる。そのような見方のもとに階級的大衆が存在する。この大衆の解放がすべての正義の根拠となる。しかし、「女」からすると、その場合の主人公は対象以上にもの見方そのものにあるように思われる。それだからこそ、自らの反対者はすべて反革命的と主張しえるのである。一方、「女」は対象としてとられられる以前の実在の権利を認める。「人間は裸だ。」(„Mensch ist nackt“)つまり、解釈以前に人間が存在する。だから、むしろ「大衆」の中から「人間」を解放することを考える。この意味では敵も味方も、階級闘争もない。大衆の自発性といったものは尊重されるが、階級的憎悪や復讐は正義ではありえない。それゆえ、「女」は現実の暴力闘争を「罪」と意識せざるを得ず、この意識の下に暴力を放棄し「白軍」による銃殺を甘受した。トラー自身はどうかというと、W・ローテは、トラーが「女」と一致し、「男」を呪っているかどうかは疑問だ、と判断している。<sup>(39)</sup>ともあれ、トラーは現実の革命における暴力の問題について、それを形式化しているだけで解答は提出していないが、しかし、決して臆することなくリアルに認識していた。

「今日、政治の次元で、経済および人間的関心の双方で闘おうとする者は、闘いの法則と結果は自分の良い意図と違った諸力によって規定されるということ、しばしば防衛と反防衛という態度が強制され、それを悲劇的に感じざるを得ず、それによって言葉の深い意味で血を流すかもしれないということを明瞭に知らなければならない。」<sup>(40)</sup>

トラーを主人公化したドラマを書いたT・ドルストはトラーを「革命をするつもりで文学をやってしまった」と批判した。<sup>(41)</sup>しかし、トラーのリアルな認識はまさに理念と現実の間に立つ彼の人間性を現わすものであった。トラーは「革命の徳(Tugend)」<sup>(42)</sup>という表現をしているが、彼は矛盾は矛盾のままにして革命の大義といったものを、大衆以前の人間の基礎の上におこうとした。無意味な殺りくを避けようとして、捕虜の生命を助け、その捕虜に裏切られるというような、確かに滑稽だけではすまされないことなどをしながら、例えばベルリンでの反革命による悲惨に対して、「我々はより正義である世界のために闘っている。我々は人間性を要求する。我々は人間的であらねばならない。」<sup>(43)</sup>と省察している。この点でコミュニストは自己の論理、自己の戦術を重視しすぎているように思われたのであった。

○ ○ ○ ○

第一次大戦の戦場で、心身共に深く痛手を負ったトラーは、反戦——平和の闘いを決意した。

その闘いは人間の正義の共同体建設の夢と重なり、かつ、当時の歴史的背景および現実の状況のもとで社会主義的潮流と合流した。それは、彼の倫理的意識と合致するものであった。1918年11月に民衆蜂起と帝国の崩壊により生じた革命的状況が発生した時、トラーはストライキ闘争からレーテ民主主義体制の確立へと続く革命の前進に身を投じた。大衆の変革への意志と連帯を力とする闘いであった。しかし、革命をとりまく外的条件の悪化と共に、トラーには内的条件も破綻してきたように思われた。彼にとっては人間的要素から出発したはずの革命が、革命の非人間的要素によって守られるという矛盾である。暴力の問題、民主主義の問題が、コミュニストとの戦術的対立の中で改めて問われた。しかし、特に暴力の問題は、解答の見い出せないまま、悲劇的な革命の原罪のようなものを感じられた。そして外部での、および内部での革命的状況の悪化の中で、トラーの闘いは人間的要素の保持に向けられた。この闘いは革命の敗北後も形を変えて行なわれた。革命が後退し、新たに民族主義的勢力が民衆の中に根を張ってきたとき、彼は劇作家として再出発したが、彼のドラマは彼がまさに政治的、社会的領域で遂行してきた、人間を獲得する闘いの別の形であった。<sup>(44)</sup>

トラー全集の編集者の一人、W・フリーヴァルトによると、トラーの保守的反対者は、彼の根なし草的存在やヒステリーを責めた。また、社会主義の批評家はブルジョア出身を決して許さず、民衆の力に対する不信、あるいは労働者階級に対する裏切りを問責したという。<sup>(45)</sup>一方、W・ローテは、「トラー伝説」とバイエルンの革命の実態について言及し、レーテ共和国のシンボル化したトラー像を真の輪郭に引き戻さなければならない、と注意している。<sup>(46)</sup>トラーの資料集の編者たちは、革命的状況が後退していく中で、彼は「真情の革命家 (Gesinnungsrevolutionär)」の理想像になったが、トラーやランダウアーのような革命家たちと民衆の間には裂け目があったことを認めている。<sup>(47)</sup>さらに、民衆を展望すると11月革命は決して「真情」の革命ではなかったとするラーテナウの見解を引用し、それゆえ、彼等の、暴力のない空想的社会構成は、暴力を決意したラディカリズムの手の中で無力だったという。そして「意識的に生み出された権力の真空に、国家社会主義やそのすべての残虐さの先行となる反革命の諸力が外部から吹き込んだのに対し、内部ではアナーキーな犠牲死の思想が戦闘的階級の没落という『カタストロフィー幻想』と解き難く結びついた。」と総括した。<sup>(48)</sup>

トラーについてはいろいろなことが言われてきたし、言えそうである。しかし、トラーの真情、トラーの意識した問題は、人間的にも、また、バイエルンの革命の現場でも、内的必然性を備えていた。トラーは政治的にドイツの歴史の歩みから疎外されていったが、それらは彼の文学に引き継がれ、今日なお政治へのアピールとしてとどまっている。

#### 注

(1) W. Frühwald/J. M. Spalek:《Der Fall Toller》250頁参考。

しかし、S. Lamb はこのようなバイエルン革命との関りの重視のマイナス面として、ワイマール共和国におけるトラーの寄与が看過され、従ってトラー像が不正確になることを指摘している。(《Das literarische Leben in der Weimarer Republik》164頁。)

- (2) Ernst Toller : Werke 4 21頁。
- (3) 同上書 69頁。
- (4) この病気について、《Der Fall Toller》においては心臓、神経病、W. Rothe : 《Toller》においては胃、心臓病とされる。
- (5) W. Rothe : 《Toller》 32頁。
- (6) Ernst Toller : Werke 4 82頁。
- (7) W. Rothe : 《Toller》 36頁。
- (8) Frühwald/Spalek : 《Der Fall Toller》 33頁。
- (9) S. Zweig : 《Zeit und Welt》 81, 82頁。
- (10) W. Rothe : 《Toller》 37, 39頁。
- (11) Ernst Toller : Werke 1 35頁。
- (12) W. Rothe : 《Toller》 40頁。
- (13) 数字は L・モーレンツ編《バイエルン1919年》(原題《Revolution und Räteherrschaft in München》)による。
- (14) Ernst Toller : Werke 4 118頁。
- (15) Ernst Toller : Werke 1 46頁。
- (16) Ernst Toller : Werke 4 89頁。
- (17) S. Zweig : 《Zeit und Welt》 81頁。
- (18) W. Rothe はこの時のことを「大衆演説家トラーが誕生した。」(《Toller》 42頁。)といているが、トルストイの場合との比較はそれ以上の意味を示すであろう。
- (19) Ernst Toller : Werke 4 95頁。
- (20) R. Peter : 《Literarische Intelligenz und Klassenkampf》 118頁。
- (21) W. Rothe : 《Toller》 14頁。この特性は逆に感情の起伏の激しさを意味するが、それは彼の情緒に訴えかける弁論の才能と結びつけて考えられる。
- (22) Ernst Toller : Werke 1 50頁。
- (23) W. Frühwald : Einleitung in Ernst Toller : Werke 1 12頁。
- (24) Toller : Werke 4 110, 111頁。
- (25) 船戸満之は、これを「ブルジョア民主主義の急進化」と解説している。(《バイエルン1919年》第一部 バイエルン・レーテ概説)
- (26) L. Peter : 《Literarische Intelligenz und Klassenkampf》 118頁。
- (27) Frühwald/Spalek : 《Der Fall Toller》 41頁。
- (28) エルンスト・ドイミヒ : 「レーテ体制」(《第三インターとヨーロッパ革命》所収) 参照。
- (29) Ernst Toller : Werke 4 147, 148頁。
- (30) Frühwald/Spalek : 《Der Fall Toller》 55頁。
- (31) Ernst Toller : Werke 4 147, 148頁。
- (32) パウル・ヴェルナー : 「ミュンヘンの経験」(《第三インターとヨーロッパ革命》所収) 参照。
- (33) Ernst Toller : Werke 4 124頁。
- (34) W. Rothe : 《Toller》 56頁。
- (35) L. Peter : 《Literarische Intelligenz und Klassenkampf》 120, 121頁。
- (36) Ernst Toller : Werke 4 138頁。
- (37) W. Rothe : 《Toller》 64頁。Ernst Toller : Werke 4 89頁。
- (38) W. Sokel : 《Ernst Toller》. In : Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert. 303, 304頁参照。
- (39) W. Rothe : 《Toller》 68頁。
- (40) Ernst Toller : Werke 4 138, 139頁。
- (41) 岩淵達治 : 「タンクレト・ドルストのトラー — 自己自身を演じた俳優 —」(《ドイツ文学》 50号

- 43頁。)
- (42), (43) Ernst Toller: Werke 4 147頁。
- (44) Frühwald/Spalek: Nachwort zu «Der Fall Toller» 245頁。
- (45) Frühwald: Einleitung in Ernst Toller: Werke 1 13頁。
- (46) W. Rothe: «Toller» 51-53頁。
- (47) Frühwald/Spalek: Nachwort zu «Der Fall Toller» 247頁。
- (48) 同上書 255, 256頁。

## 参 考 文 献

- Toller, Ernst: Gesammelte Werke in 5 Bänden. Mit einer Einleitung von Wolfgang Frühwald. Printed in Germany, 1978.
- Frühwald, Wolfgang und Spalek, John M.: Der Fall Toller. Kommentar und Materialien. Mit einem Nachwort von den Herausgebern. Printed in Germany, 1979.
- Lamb, Stephen: Ernst Toller. In: Das literarische Leben in der Weimarer Republik. Printed in Germany, 1978.
- Peter, Lothar: Literarische Intelligenz und Klassenkampf. Köln, 1972.
- Rothe, Wolfgang: Ernst Toller. Reinbek bei Hamburg, 1983.
- Sokel, Walter: Ernst Toller. In: Deutsche Literatur im 20. Jahrhundert. Bern, 1967.
- Zweig, Stefan: Zeit und Welt. Stockholm, 1946.
- 山本 尤 トラー『ヒンケマン』— 表現主義ドラマの悲劇 — 現代ドイツ戯曲論集:クヴェレ会 大阪 1971。
- 岩淵達治 タンクレント・ドルストの「トララー」— 自己自身を演じた俳優 — ドイツ文学 第50号 日本独文学会 東京 1973。
- 野村 修 バイエレン革命と文学 東京 1981。
- モーレンツ編 船戸満之概説 守山 晃訳 バイエレン1919年— 革命と反革命 — 東京 1978。
- 中村丈夫編 第三インターとヨーロッパ革命 東京 1975。